様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　6　月　6 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530426
研究課題名（和文）　イエ存続戦略と地域ネットワークの展開に関する経験的研究

研究課題名（英文）　Empirical Research on survival strategies of *Ie* and the development of regional networks

研究代表者
永野　由紀子　（NAGANO　YUKIKO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30237549

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本の農山村地域での聞き取り調査をとおして、庶民の生活実態としての「家」について考察することである。西日本や東日本の調査から、今日の農村では、山間部を中心に、過疎化と高齢化が進行しており、世代を越えての連続が難しくなっている現状が明らかになった。だが、稲作中心の平野部では、一子単独相続によって家産と家業と家名を超世代的に継承する「家」が広範に分布する。三世代・四世代の同居世帯の農家が多い山形県庄内地方の事例研究から、「家」が存続するための今日的条件として、(1)安定した農業収入が得られる基盤があること及び(2)通勤兼業が可能であることという 2 つの地域的条件が示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine *ie* of the people by analyzing the findings of field survey at Japanese village. The survey revealed several points. First, depopulation and aging has been increasing in the mountain villages. Second, *ie* where the family property, the family business, and the family name are succeeded to by only one heir has widely been observed in the farm villages in plains. Two regional conditions for *ie* to continue from the survey of the Tohoku region were shown. First is the steady base of farm management. Second is that it is possible to engage in farming while commuting.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：イエ，ムラ，家族，相続，農村

## １．研究開始当初の背景

### (1)「家」の通説理解

「家」研究は、社会学をはじめ民俗学、人類学、歴史学、社会史、法制史、法社会学とい

った広範な分野に及ぶ研究蓄積を特色とし、豊富な実証研究に支えられた研究成果を結実させてきた。だが、「家」の規定については、有賀・喜多野論争に代表されるように、必ずしも統一的な見解を得てきたわけではない。今日、「家」の通説理解とされているのは、「家」を「民主的」性格の近代家族と対比して「家父長的」性格の伝統家族とみなす見解である。こうした「家」の通説理では、家制度や家イデオロギーと区別された生活実態としての「家」の位置づけが不明確であり、生活者の「家」もまた、「封建遺制」ないしは「前近代的」性格の残存として否定的に位置づけられるにすぎない。

（2）「家」戦略と歴史人口学の研究

近年、こうした通説理解と一線を画した「家」存続戦略の研究が、米村千代（『「家」の存続戦略』1999）と森岡清美（『華族社会の「家」戦略』2002）によって発表された。これらは、制度やイデオロギーに解消されることのない生活実態としての「家」研究として高く評価される。だが、近代の財閥ないしは華族を対象とする研究であり、庶民の生活組織について論じたものではない。一方、歴史人口学は、家族の地域的ヴァリエーションの解明を企図した国際的なプロジェクトであり、日本の「家」を、こうしたグローバルな視野のもとにおいたことは、高く評価されよう。だが、かなり長い空間的時間的パースペクティブのもとで、家族人数や家族構成の変化を追求するものだけに、数字で見えてくる世界の限界を見極める必要があろう。

（3）本研究の位置づけ

本研究は、上述した（1）（2）の研究動向に対して、生活者に視点を据えた〈いま・現在〉の「家」存続戦略と地域ネットワークについて、フィールドワークを重視した実証研究を行うことで、その欠を補うことを企図するものである。

## ２．研究の目的

本研究は、日本の農山村地域のフィールドワークをとおして、〈いま・現在〉の生活者の「家」の実態を探求し、「家」存続戦略と地域ネットワークの展開を関連づけて考察することを目的とする。「家」は、サラリーマン社会に転換する高度成長期以前には、日本の社会の一般的な生活システムであった。今日、「家」が広範に見られる地域は、農山漁村である。生活者の「家」とは、ここでは農家を指す。今日の農家の圧倒的多数は、兼業農家である。戦略という用語を、自らの目的を達成するに困難な状況変化や危機的状況を前にして、内なる資源を最大限活用することで状況に能動的に対応することと規定するならば、兼業は、必ずしも農業離れの傾向ではなく、農業を続けための農家の戦略として位置づけられる。また、兼業農家でも、農地を売却して離農しない限り、農地は、農家の後継者に家産として一括して継承されている。農外からの新規就農は、現在のところきわめて少数であり、農家の後継者の就農が圧倒的多数を占める。つまり、今日でもなお、農家は、家産と家業の継承をとおして維持される世代連続的な生活システムである「家」として存立している。

## ３．研究の方法

本研究は、研究目的を達成するため、平成19年度、20年度、21年度の3年間にわたり、東日本と西日本の農山村地域を対象とする調査研究を実施し、農家の生活構造と生活システムのヴァリエーションを比較検討して、「家」存続戦略と地域ネットワークの展開について考察した。

その際、統計的データや資料の分析によって得られる地域の概況の把握のみならず、現地に出向いて資料や情報を収集すると同時に、調査票を用いた自由回答形式の聞き取り調査を実施し、生活者の経験を語る生の声のデータを収集した。

（1）調査対象地

①山形県庄内地方
②岐阜県大野郡白川村
③愛媛県南予地方内子町

（2）調査の内容

①予備調査：関係諸機関での資料収集や地域リーダーへの聞き取り調査をとおして、人口や家族構成、世帯数、高齢化率、農家世帯率、産業構造、専兼別農家数、経営規模別農家数、作付面積や販売面積等の地域の概況や地域農業の現状の把握に努めた。

②本調査：山形県庄内地方櫛引地区の農家を対象に、家族構成や家族の就労状況、家族内の役割分担や家計構造、地区会や公民館、生産組合や生活班、消防団や氏子組織といった地域の様々な生活・生産組織と会合、道路や水路の清掃をはじめ地区の様々な共同作業や行事について、自由回答形式の聞き取り調査を実施した。

## ４．研究成果

（1）平成19年度の成果

研究の初年度として、研究テーマに関わる統計資料や歴史的文献の収集を行うと同時に、山形県庄内地方鶴岡市と愛媛県南予地方内子町を対象地とする現地調査を実施した。その結果、以下のことが明らかにされた。

・山形県庄内地方について

①歴史的資料から、明治民法施行以前は、姉家督慣行が広く見られる地域であることが明らかにされた。

②現在も農村では、三世代・四世代同居の直系家族がほとんどである。

③明治民法施行後は、長男相続が多いが、姉婿養子も多い。
④近年は、後継者の配偶者不足や高齢者世帯の増加のため、イエの存続が不安定になっている。
⑤米価の暴落と農外労働市場の変化により、稲作農家の経営危機が深刻化している。
⑥直売所や有機農業に取り組む農家もでてきたが、農協に全く出荷しない農家はまだ例外的である。
・愛媛県南予地方について
①歴史的資料から、隠居別居慣行が広く見られる地域であることが明らかにされた。
②平場農村と異なり、稲作は自給的で、タバコや畜産、野菜作、炭焼きが伝統的に行われていた。
③通勤兼業化地帯とはいえず、農家世帯の減少、高齢化世帯の増加が顕著である。
④山村部では、耕作放棄地もかなり見られる。
⑤直売所や有機農業に取り組む農家もある。
（2）平成 20 年度の成果
研究の 2 年目にあたる本年度は、研究テーマに関わる統計資料や歴史的文献の収集を前年度に続いて継続すると同時に、前年度の予備調査の結果をふまえ、岐阜県大野郡白川村と山形県庄内地方鶴岡市を対象地とする本調査を実施した。その結果、以下のことが明らかにされた。
・山形県庄内地方について
①歴史的資料から、最上川の川北と川南では、かなり歴史や文化が異なるし、川南のなかでも、旧鶴岡市と旧東西田川郡とでは異なる。
②統計的には、水田の経営規模が大きく、稲作を中心に第一種兼業農家が全国と比すると相対的に多い。
③庄内地方の農村は、全国的に見ると、三世代・四世代同居の直系家族が多いが、近年は、高齢者夫婦だけの世帯や高齢者単身世帯も若干でてきている。
④農業専業的な農家は、直売所に出荷する等、果樹作や野菜作を中心に複合部門の比重が高い。
・岐阜県大野郡白川村について
①歴史的資料から、中切地区と大郷地区と山家地区と大きく三地区で歴史や産業や文化が異なる。
②平場農村と異なり、稲作は自給的で、炭焼きや硝煙や山桑依存の養蚕が伝統的に行われていた。
③山村の豪雪地帯であるため、人口減・世帯減・高齢化が顕著である。
④世界遺産登録後、若い世代のＵターンやＩターンによる人口増・世帯増が見られる。
(3)平成 21 年度の成果
研究の完成年度にあたる本年度は、山形県鶴岡市Ｈ地区及び岐阜県大野郡白川村で補充調査を実施すると同時に、これまでの研究成果を集約して国内及び海外の学会で発表し、質疑応答をとおして研究テーマに関する知見を深めた。
①対象地域はいずれも、積雪量が多いため世帯減・人口減が顕著な地域である。
②山形県鶴岡市のＨ地区は、家屋の建て替えの時期に、通勤兼業がしやすい近隣の平場に転出するかたちの挙家離村が多い。親夫婦を残して若い夫婦だけが転出するケースは少なく、高齢者の単独世帯や高齢夫婦だけの世帯は多くない。
③岐阜県白川村は、通勤兼業が困難であるが、世界遺産登録後、若い世代のＵターンやＩターンによって人口減・世帯減がとまっている。
(4)まとめ：日本のイエの特質
通勤兼業や観光などの条件によって、現代でもなお嫡系夫婦二世代が同居するイエは存続している。イエの統合性は、イエを取り巻く生活諸条件の変化によって変化する。一子単独相続によって超世代的に連続するイエは、近代化や産業化のなかで解体したとは単純に言いきれない。
（5）今後の課題
アジアという視野で、これまでの研究成果を位置づける必要が明らかになり、アジアの地域や家族と比較して、日本のイエやムラの特質を明らかにするという今後の研究課題が明確になった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2　件）
①<u>永野由紀子</u>「姉家督と『家』」『ヘスティアとクリオ』No7、33-54 頁、2008 年 8 月、査読有
②<u>永野由紀子</u>「インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体」『山形大学紀要（社会科学）』第 14 巻第 2 号、2007 年（平成 19 年）2 月（平成 19 年）、161―208 頁、査読有

〔学会発表〕（計 3　件）
① <u>永野由紀子</u>「東北農村のムラにおける共同性の連続と非連続」第 57 回日本村落研究学会大会自由報告、京都府綾部市・ホテル広子園、2009 年 11 月 1 日
②<u>永野由紀子</u> “Increase in Migrants in Bali Caused by Global Tourism:A case study at Pemogan Village in the Suburbs of Denpasar” 第 9 回アジア太平洋社会学会大会,インドネシア・バリ州・カリタプラザホテル、2009 年 6 月 14 日
③ <u>永野由紀子</u>「現代の東北農村のムラにお

けるイエとイエとの関係―旧藩制村の範域における共同性―」香港大学ワークショップ「日本と中国のコミュニティの比較研究」、中華人民共和国・香港・香港大学、2009 年 5 月 7 日

〔図書〕（計 4　件）
①　（共編著）永野由紀子「イエ存続戦略としての姉家督」『家存続戦略と婚姻』（國方敬司･長谷部弘等 13 名）刀水書房、86-103 頁、2009 年 10 月
②（共著）永野由紀子「エスニシティと移住者」『変わるバリ、変わらないバリ』（倉沢愛子･吉原直樹等 16 名）勉誠出版、148-168 頁、2009 年 3 月
③（共著）永野由紀子「交錯するエスニシティと伝統的生活様式の解体」『グローバル・ツーリズムの変容と地域コミュニティの変容』（吉原直樹等 6 名）お茶の水書房、131～175 頁、2008 年 2 月
④（共著）永野由紀子「家族構成の変化と兼業化」『むらの資源を研究する』（日本村落究学会編・池上甲一等 25 名）農山漁村文化協会、161～170 頁、2007 年 3 月

〔その他〕
ホームページ等
①（小論）永野由紀子「バリの村・日本の村」『勉誠通信』11 号、6-7 頁、2009 年 8 月
②（コラム）永野由紀子「バリ下層社会」『変わるバリ、変わらないバリ』（倉沢愛子･吉原直樹編）勉誠出版、104-105 頁、2009 年 3 月
③　（コラム）永野由紀子「スバック」『変わるバリ、変わらないバリ』（倉沢愛子･吉原直樹編）勉誠出版、186-187 頁、2009 年 3 月
④（書評）永野由紀子　天野寛子・粕谷美砂子著『男女共同参画時代の女性農業者と家族』『図書新聞』2889 号、2008 年 10 月
⑤（書評）永野由紀子　つる理恵子著『農家女性の社会学』『農業と経済』6 月号、2008 年 5 月､110 頁
⑥（書評）永野由紀子　森本一彦著『先祖祭祀と家の確立』『家族社会学研究』第 19 巻第 1 号、76-77 頁、2007 年 4 月

６．研究組織
(1)研究代表者
永野　由紀子（NAGANO YUKIKO）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30237549

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：